



# ギターに歌作り「いい刺激」

神奈川県横須賀市の松浦謙一さん(67)は、「認知症シンガー・ソングライター」と名乗り、バンド活動を続けている。

51歳の時、転びやすくなり、パーキンソン病と診断された。ショックで落ち込んでみると、それを知った高校時代のバンド仲間が、「また音楽をやるか」と声をかけている。

をにかけてくれた。約30年ぶりにギターを手にし、作詞・作曲も始めた。

60歳代になると、認知症を疑う症状が出始めた。一時的に記憶が欠落する、実際には存在しない人や虫が見える、勘違いや見間違い、会話が成り立たない時間がある、などの症状だ。63歳の時、レビー小体型認知症と診断された。

ルツハイマー型がよく知られるが、ほかに、レビー小体型、血管性、前頭側頭型などがある。レビー小体型は存在しない物が見える

「幻視」や睡眠時の行動障害などの症状が特徴的だ。市内の汐入メンタルクリニック院長で、主治医の阿瀬川孝治さんは「パーキンソン病とレビー小体型認知症は、発症メカニズムに共通点があり、『レビー小体型』と総称される」と説明する。

松浦さんも足がこわばり、自宅の階段で転んで右手の指を3本骨折したことがある。骨が治った後は一層ギターの練習に打ち込んだ。「リハビリにもなったと思う」と振り返る。人前で演奏することは「本当にいい刺激」と話す。

阿瀬川さんは、「松浦さんの場合、ドーパミンの働きを補う薬などもよく効いているが、何より本人が音楽活動などに意欲的に取り組んでいることが、よい状態を保っていることにつながっていると思う」と話す。生活の質を保つには、周囲のサポートも重要だ。松浦さんは日時を間違えやすい面があるという。そのため、連絡役は妻のえり子さん(61)が受け持つ。

自作の「線香花火」にはこんな一節がある。ハセミは命を歌に替え／思い出花火／線香花火

(この項つづく)

\*過去記事はヨミドクターで



自宅で、愛用のギターを手にする松浦謙一さんと妻のえり子さん

その後、作詞した「ふるさと」はフォークソング調の曲だ。△落ち穂に集まる小鳥たち／稲叢のある風景▽。歌詞にはよく、幼児期から住む横須賀の今昔の風景を詠み込む。△ふるさとの景色は今も変わらず／ふるさとの友の笑顔も変わらず▽

認知症では、ア



過去記事はヨミドクターで